ソッテラーネオ『歴史の中の天使』　撮影：Giulia Di Vitantonio



［イタリア］

# 困難の中で発揮されたクリエイティビティ

ヴェリア・パパ

## 舞台芸術へのさまざまな支援

2020年、イタリアの劇場は新型コロナウイルス感染症による最初のロックダウンで完全閉鎖を余儀なくされたが、最悪の時期を乗り越え、現在、失った観客を取り戻し、勢いが衰えた芸術活動の再起を目指して奮闘している。感染症の影響で、10月から5月の間に劇場で行われる公演のシーズンセット券を購入していた観客までもが、その習慣を見直すようになった。

多くの劇場は、シーズンの終わりに次シーズンのセット券を販売し、観客に購入してもらうことで、次年度の運営にかかる費用の大部分の目処を立てていた。しかし、ウイルスは根絶されたわけではない。ワクチン接種やさまざまな感染症対策により、一定の安全は確保されて

いるものの、定期的に起こる感染者数の増加という事実は、観客が以前のように劇場に足を運ぶことを妨げている。

感染症の蔓延という不測の事態は、イタリアの劇場の経済的サスティナビリティをさらなる窮地へと陥れている。

イタリアでは、芸術のジャンル（音楽、オペラ、演劇、舞踊、サーカス）、事業のカテゴリー（プロダクション、プログラミング、フェスティバル）、法人格の種類（地方自治体の出資がある公共機関、民間会社、インディペンデント・グループ）に則って、劇場は国から経済的支援を受けている。イタリア文化省は、2020年から2021年前半にかけて、通常の支援に加えて、舞台芸術業界における雇用の維持、感染症対策にかかる費用（定期検査、マスク、消毒）の負担軽減のための財政支援を行った。ただし、イタリアの舞台芸術界に関していえば、活発な経済活動を促進するには、これまでの政府による支援もけっして十分とはいえない。実際、舞台芸術のための資金を配分するFUS（舞台芸術総合基金）は、2019年（2020年、2021年の予算作成の基準となる年）に3億4,600万ユーロ（GDPの0.02%相当）を拠出したが、この予算は2001年に比べ31%減となっている[(1)]。

ほかにも、今日のイタリアにおける舞台芸術作品の創作活動はさまざまな形式での支援を受けている。数年前からアーティスト・イン・レジデンスが支援事業として認可された[(2)]。現在、イタリア国内には、国や州政府から財政支援を受ける79のレジデンス事業がある。創作活動を行うアーティストを受け入れることが可能なスペースやテクニカル機材を持つ施設で、特に若く、まだあまり知られていないアーティストの作品を世に出すことを目的としている。これは、多分野・ジャンルの作品を扱う約20のフェスティバルが、共同製作する形でコンテンポラリー作品の創作を支援し、ショーケースの役割を担っていることとも通じている。



## 観客との関係をつなぐ新しい実験

さまざまな困難に直面したものの、大きな混乱が起きた感染症拡大の初期を越えてからは、多くの劇場が、感染症対策の規制下にありながらも、観客との関係を維持するための新しい方法を生み出す実験を積極的に行った。

例として、多くの作品を創作し続け、イタリアで特に注目に値するアーティストの一人、マルコ・バリアーニ（Marco Baliani）作・演出による『クリスタルハウスの中の俳優（L'attore nella casa di cristallo）』を挙げる。観客同士の間隔が保たれれば野外で公演をして良いという許可が出たことを受けて、2020年6月に初演された。アーティストや人が孤立せざるをえない状況に対しての怒りやフラストレーションを表す演劇的インスタレーションだった。初演が行われたイタリア中部の湾港都市アンコーナのムーゼ劇場（Teatro delle Muse）に面

する広場には、巨大で透明なケースが二つ設置され、各ケースの中で演じるパフォーマーが発するテキストを観客がイヤホンを通して聴くというものだった[3]。

屋内での上演に課せられた制限に対し、アーティストたちは空間や作品の構成において既存の概念にとらわれない解決策を探した。アレッサンドロ・シャッローニ（Alessandro Sciarroni）の近作が良い例である。シャッローニは2019年、ヴェネチア・ビエンナーレ・ダンス部門で金獅子賞を受賞し、イタリアの舞台芸術界だけでなく、海外で最もよく知られているイタリアのアーティストと言っても過言ではない。かつて流行したものの、現在は忘れ去られてしまっているダンスを再解釈した『ラストダンスは私に（Save the last dance for me）』（2019）、ダンスカンパニー「コレッティーヴォ・チネティコ（CollettivO CineticO）」との協働制作で、複数のパフォーマーが繰り返す動作によって観客との間に催眠作用のある対話が生まれる『ダイアローグⅢ：風景のなかで（Dialogo Terzo: IN A LANDSCAPE）』（2020）、そして、観客が展示空間を自由に移動し、好きなだけその空間にとどまることができる最新作『ドリーム（Dream）』など、従来の劇場空間にとどまらず、発表の場に合わせた作品を創作する彼のリサーチは、観客と共感が生まれる関係を創ることに終始するものである。

アレッサンドロ・シャッローニ『ラストダンスは私に』
© Claudia Borgia, Chiara Bruschini

コレッティーヴォ・チネティコ＋アレッサンドロ・シャッローニ
『ダイアローグⅢ：風景のなかで』

その他、多くのアーティストが、単に作品の映像を撮るだけでなく、デジタルやテクノロジーを利用し、インターネッ

トの可能性を追求し、どのような方法で観客に作品を届けることができるか、挑戦を重ねた。もちろん、どんなテクノロジーを使っても、生の舞台が持つ魔法に代わるものはないということは認識した上でのことだ。

ニコラ・ガッリ（Nicola Galli）の『ジェノマ・シェニコ（Genoma scenico）』は、特筆に値するものだろう。ライブ・ストリーミングというデジタル・デバイスを活用し、予め用意されたゲームのルールの中で、観客がリモートで自分の振付を創ることができる。

オーディオヴィジュアル作品が、映画やビデオアートなどの世界でも高く評価されたアーティストもいる。振付家のルカ・シルヴェストリーニ（Luca Silvestrini）はビデオ作品『ザ・サン・インサイド（The Sun Inside）』[(4)]で複数の賞を受賞、演出家のジュゼッペ・ピッチョーニ（Giuseppe Piccioni）による、コロナ禍における舞台作品の創作活動という先例のない体験を題材にしたドキュメンタリー『夕の祈り―散歩日記（Preghiera della sera – Diario di una passeggiata）』は、2021年のヴェネチア国際映画祭でショート・フィルム部門の特別賞を受賞している。

## 観客に寄り添うアーティストたち

エネルギー価格の高騰や、経済状況の悪化につながるウクライナでの戦争といった外的要因により問題は増え続けているが、イタリアの舞台芸術界は、クリエイティビティの観点では、実り多い時期にあると言えるだろう。社会で起きている問題を取り上げ、直接的なナラティブや強い自己主張を一方的に掲げることを避け、現代に広がる複雑な問題の前に、皆が抱える不確実性や不安、そして死といったテーマに寄り添うような形で、観客とより密接な関係を作り上げようとするグループやアーティストたちがそれを証明している。

演劇で使われる言葉は、前代未聞のパラドックスや相似点を浮き彫りにすることができるが、演劇とは、けっしてテキストだけからなるものではなく、舞台に立つ身体という物理的存在のリアリティから生まれるものだ。それは、演じられるキャラクターとしてというよりも、舞台に立つ人物のこれまでの人生、そして彼ら個人が持つ特有の表現力によるものである。作家、演出家、俳優であるリヴ・フェッラッキアーティ（Liv Ferracchiati）が良い例だ。透明でありながら、同時にどこか曖昧さも残し、皮肉めいた暗喩を醸すテキストは、時に即興も厭わず、ジェンダーや変化、環境といったテーマを取り上げる。最新作『サイエンス・フィクション・パフォーマンス（Uno spettacolo di fantascienza）』では、北極に生息するセイウチが氷河融解のために方向感覚を失い、自分のすみかの位置が分からなくなり溺れていく様子と、個々人のアイデンティティがずれて変容していく様子をうまく対比させている。

ソッテラーネオ（Sotterraneo）も独創的な方法で言葉を使っている。ドイツ人哲学者ヴァ

リヴ・フェッラッキアーティ『サイエンス・フィクション・パフォーマンス』
撮影：Giulia Di Vitantonio

ルター・ベンヤミンの理論とイスラエル人歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリの学説に影響を受け、コレクティブ・ライティングを経て創作された最新作『歴史の中の天使（L' Angelo della Storia）』では、言葉と動作が出会うことで、歴史的逸話に満ちたフレスコ画を描き出すようなドラマツルギーが生まれた。あらゆる悪を正当化するために受け入れられやすい物語を作り上げるホモ・サピエンスの能力、人間の滑稽さを浮き彫りにするエピソードばかりだ。このグループの素晴らしいところは、シニカルと言えるほど、客観的に問題を取り上げつつも、同時に軽妙で風刺的である点だ。結果、観客は楽しみながら、非常に重大なテーマと向かい合うことができる。



## 評価の高まるイタリアのダンス

また、現在のダンスシーンから国内でも有数の革新的なアーティストが輩出されていることは間違いない。高度な技術や幾何学的な振付を避け、演劇的手法に影響を受け、その手法や、映画や美術などから派生した異なる美学を作品の構成にも取り込んでいる。海外での評価の高まりとともに、再評価が広がるこのジャンルのアーティストを何組か紹介する。

城崎国際アーツセンターでのレジデンスも行ったジネーヴラ・パンツェッティ（Ginevra Panzetti）とエンリコ・ティッコーニ（Enrico Ticconi）のデュオは、無限に存在する大衆文化に根付く動作を、ダンスへと昇華させる。イタリアのコメディア・デラルテで、召使から王様になるアルレッキーノが使用する仮面をモチーフにした『ハーレキング（Harleking）』、旗振りの繰り返される動作の持つ意味やアイコンとしての価値を掘り下げる『ARA! ARA!』など、その作品は無闇に振りかざされる虚飾の権力から、全く反対の自然との調和が表れる民族舞踊のリズムにいたるまで、多岐にわたるテーマに取り組むものだ。

コロナ禍でより深刻化した環境問題に対する関心も、アーティストの間で高まった。非常に若いパフォーマー、ルドヴィコ・パラディーニ（Ludovico Paladini）は素材の再利用を行うことで、「貧しさやみすぼらしさ」を取り入れ、ものごとの変容や人と自然の関係性をテーマ描いた非常に革新的で独創的な作品を作っている。

デューイ・デル（Dewey Dell）の作品も人類の進化、他の生物種とのハイブリッド化について取り組む、変身をテーマとしたものだ。このグループは、演劇、ダンス、音楽のジャンルをしなやかに越えることのできるパフォーマーで構成されており、まさしく現在のイタリアの創作活動の傾向を表しているとも言える。さまざまな芸術ジャンル（演劇、音楽、ダンス、美術）から派生する表現手段、技術、構成方法をたやすく使いこなすため、どのジャンルの作品と定義するのは非常に難しい。

ムタ・イマゴ（Muta Imago）においても同様で、演劇的ドラマツルギーと、楽曲、インスタレーションが織り混ざる作品を発表している。特に近作、チェーホフの『三人姉妹』、サウンドインスタレーション『ソノラ砂漠（Sonora Desert）』、マルチメディア・パフォーマンス『灰（Ashes）』をここに挙げる。

フランス人振付家ジェローム・ベル（Jérôme Bel）の例に倣い、多くのアーティストが飛行機のような環境負荷の高い移動手段を拒否し、旅をせず、主に拠点とする地域のコミュニティとの関係性を深めるようなプロジェクトや、自然、建築、人間のランドスケープを再発見するようなプロジェクトに取り組むようになっている。

ルドヴィコ・パラディーニ『Tales of FreeDoom』撮影：Giulia Di Vitantonio／写真提供：Marche Teatro-Inteatro Festival

デューイ・デル『I'll do, I'll do, I'll do』撮影：Giulia Di Vitantonio

とはいえ、移動し、他の文化と出会うことは芸術作品の制作には不可欠という認識のもと、イタリアのいくつかの劇場が連携し、「Crossing the Sea」というネットワークを立ち上げた。こ

のプロジェクトでは、ヨーロッパ以外の国の芸術機関の協力のもと、最大2週間、イタリア人アーティストがリサーチやスタジオワークを行うための資金援助を行っている。また、引き換えに、イタリアの「Crossing the Sea」主催者たちが海外のアーティストのイタリアでのレジデンスを提供することもある。

---

（1） 文化省「Osservatorio dello spettacolo」のデータより。
（https://spettacolo.cultura.gov.it/osservatorio-dello-spettacolo/）

（2） 文化省アーティスト・イン・レジデンスのウェブサイト（www.residenzeartistiche.it）より。

（3） マルコ・バリアーニ作・演出『クリスタルハウスの中の俳優』のトレーラーは以下で見ることができる。
https://vimeo.com/518095674

（4） ルカ・シルヴェストリーニ『ザ・サン・インサイド』は以下で見ることができる。
https://www.youtube.com/watch?v=nzV_hDIN0GA

＊原稿中のアーティストなどのオフィシャルサイトを下に列挙する。
マルコ・バリアーニ　www.marcobaliani.it
コレッティーヴォ・チネティコ　www.collettivocinetico.it
アレッサンドロ・シャッローニ　www.alessandrosciarroni.it
ニコラ・ガッリ　www.nicolagalli.it
ソッテラーネオ　www.sotterraneo.net
ジネーヴラ・パンツェッティ＆エンリコ・ティッコーニ　www.panzettiticconi.com
デューイ・デル　www.deweydell.com
ムタ・イマゴ　www.mutaimago.com
Crossing the Sea　www.crossingthesea.org



**Papa, Velia**
世界的に有名なパフォーミング・アーツ・フェスティバル「インテアトロ（Inteatro）」の芸術監督であり、イタリア文化省の認可を受けた公共機関で、舞台芸術作品の製作を行う劇場「マルケ・テアトロ（Marche Teatro）」のCEO。特に実験的な作品についての造詣が深く、イタリア国内外の新進芸術家の発掘とその活動の支援を行うほか、ヨーロッパのいくつかのネットワークを設立したことでも知られている。国際会議や講演、セミナーなどへの登壇も多い（サンフランシスコ、クリチバ、バルセロナ、ムルシア、チュニス、ロンドン、チューリッヒ、ローマなど）。現在はローマのシルヴィオ・ダミーコ国立演劇芸術アカデミー（Accademia Nazionale d'Arte Drammatica Silvio d'Amico）で教鞭もとっている。

（翻訳：並河咲耶）